

町家は街の歴史博物館

奈良町モノ語り

調査から③

なら 民俗通信

神野 武美



神野 武美

（1935）年築の建物。平城京外京の南端に位置する両家は、近世から戦後に至る様々（さまさま）な生活文化、多くの歴史の遺産を遺す「街の歴史博物館」である。

萩原家は、元々農家である。所蔵品には、明治21（1888）年発行の3冊の「大和国添上郡京終村土地臺帳」がある。また、萩原家は、ため池の「福壽池」で養魚業を営んだこともあった。ため池は昭和45（1970）年に埋め立てられ、農具や養魚業の道具の大半は廃棄されたが、正弘さんは、唐箕（とうまき）、脱穀機、草取り機、ため池の水を抜く時に使う桶の簧（ひんす）や魚籠（いさご）などを写真に収めた。

▼2つの「講」を守る
倉庫の天井には、「天保十五（1844）年辰六月吉日」と墨書された直径120センチの大太鼓が釣り下がる。「南都磨」は、「陰陽町 陰陽師 藤木長門」と銘のある文政11（1828）天保10（1839）年のうち11年分が残る。「福壽池」の底から出てきた白鳳時代の（6世紀後半）から室町時代の軒丸瓦なども保存し、それらをテイチク跡に移転したばかりの元興寺文化財研究所が調査し、「幻の古代寺院」と言われた福壽の实在が証明された。

▼谷井友三郎の記憶
吉岡家住宅は、長らく空き家だった。地元在住の作家 齋美千子さんが、保存と買い取りを訴えた

方や決め事は、昭和43（1968）年作成の「萬（よろず）覚帳」に記載されている。

▼住民参加の可能性
両家での調査は、平成25（2013）年1月から毎月地元の璉城寺で開催される歴史文化の勉強会「京終さん」での出会いによるところが大きい。ほぼ同時期に、元興寺文化財研究所も京終・肘塚地区住民の協力で文化財の調査を行い、「地域住民の方々との連携による歴史文化の掘り起こし」という目指すべき姿が理想的な形で形作られた」と報告している（元興寺文化財研究所地域連携プロジェクト成果報告書第1集「ならまちの南玄閣」2017年1月、42頁）。

近世から残る生活文化

▼北京終町の町家2軒
公益社団法人奈良まちづくりセンターが、平成28年度文化庁助成「奈良町モノ語り調査」を実施した町家3軒のうち、北京終（きたきよ）（北の萩原家と吉岡家（旧藤井家）について報告する。

萩原家は、増築や改造の痕が著しいが、軒先にはガス管が通り、ガス灯が残っていることから電気が通る以前の建物らしい。

70年に埋め立てられ、農具や養魚業の道具の大半は廃棄されたが、正弘さんは、唐箕（とうまき）、脱穀機、草取り機、ため池の水を抜く時に使う桶の簧（ひんす）や魚籠（いさご）などを写真に収めた。

軒とともに、地元の飛鳥神社に伝わる「当夜座講（とうやざこう）」（毎年10月）と、春日大社と縁の深い「春日講（しゅんにちこう）」（毎年1月）という伝統行事を守り続けている。

この家は、戦後奈良の観光振興に貢献した映画館主・谷井友三郎（1901〜1979）が生まれた場所である。今の建物は、兄の藤井駒治郎が建てたもので、友三郎は谷井家の養子となり、戦前は、各地の内国博覧会を回り、春日大社の楼門を象（かたど）った「奈良館」を建てると企画制作の才能を発揮した。

戦後は、映画館経営の傍ら「春日若宮おん祭り」の時代行列を復活させ、「奈良遷都1500年祭」では、奉祝会長として名優・長谷川一夫を聖武天皇に見立てた行列を演出した。

「奈良町モノ語り調査」は今年度も継続しているが、地元の歴史を肌で知る住民、古文書の解説などに取り組む市民ボランティアが参加する文化財調査という形を、さらに追求していきたい。

今では登録有形文化財である吉岡家は、昭和10

例えは、アルバム2冊に収められた清酒一升瓶（びん）のラベルは「扱った全銘柄を保存している。昔は蔵元から生酒を桶買（か）いし一升瓶に直詰めて火入れ、「萩原商店直詰」として販売していた。火入れ用の鉄釜、一升瓶に栓をする打栓機、店

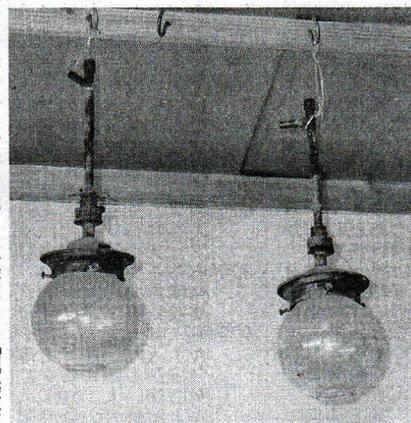
また、酒樽のタボ抜き、鏡割りで使われた道具類の絵や、また子どもだった終戦直後の家の平面図などを自ら描き残している

当屋（当番の講員）宅の床の間にそれぞれ、菅原道真像、春日鹿曼荼羅（まんだら）を祀（まつ）る神事である。そのやり

プロクを見て購入したのが吉岡卓也、幸子夫妻だった。

しかし、映画館は廃業し、奈良観光の立役者であった友三郎の記憶も消えていた。そんな時、吉岡家の主屋から見つけた4本の「幣串」（上棟式の祝いに飾る細長い木の板）は①昭和10年の藤井駒治郎宅の昭和14年の観光大和歴史館②昭和21（1946）年の友楽座③昭和24年の奈良映画劇場のいずれも上棟式

（じんの・たけよし）奈良まちづくりセンター理事



萩原家に保存されているガス灯

友三郎の4男・田中昭光さんは、入居直後の吉岡さんに560頁（ページ）に及ぶ「谷井友三郎伝」を贈った。吉岡幸子さんは、それを基にネットで県立図書館のデジタルアーカイブを検索して、上棟式の写真を見つけ、その記憶を呼び覚ました。



吉岡家にある「幣串」の一つ。昭和21年築の「友楽座」のもの